

Title	ナポレオンの性格(ホランド・ローズ著, 砂川一平譯)
Sub Title	
Author	平山, 榮一(Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.2 (1936. 7) ,p.188(356)- 190(358)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360700-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

章華社版「世界文化史」(近代篇)

緊迫した現下の世界事情に鑑み、近代世界文化の正確公平な知識を與へんとする目的から編輯された本書は著名な七名の近世史家によつて各部門が擔當されてゐる。

文藝復興時代の文化(大類伸)に於ては先づ「文藝復興」の概念を説明して人文主義に及び、當時の社會的政治的變遷を述べてルネサンスの文藝美術を物語る。第二篇宗教改革(山中謙二)では宗教改革を中心として近世初期の最も變化に富む時代相が概説され、次の民族國家勃興時代(齋藤清太郎)ではイギリス、フランス、ロシア、プロシアの各國史とアメリカ合衆國の獨立が記述され、更にフランス革命とナポレオン及び自由主義動搖時代(間崎万里)では近世史上の最大事件たるフランス革命と波亂に富むナポレオン時代が説明され、七月革命、二月革命を経て第二帝政の没落までを記す。第五篇民族統一時代(時野谷常三郎)に入るとローマン主義、民族主義の發生からイタリア、ドイツ兩國の統一を述べ、アメリカ南北戦争とバルカン問題を説明してゐる。帝國主義時代(佐藤堅司)は第十九世紀後半に於けるヨーロッパ各國が産業革命の影響による經濟發達の必然的結果として世界政策を採用するの餘儀なきに至つた事情に筆を起してヨーロッパ列強の植民地經營と日米を中心とする極東問題に及び大戰前の世界狀態を説明する。最後の世界大戰と現代(齋藤茂)に於ては大戰とそれ以後を敘述して最近の支那問題に筆を結んでゐる。全部で四

二五頁である。

最近、伊エ問題の展開はドイツの進展と共にヨーロッパを攪亂し、更に極東の日本を中心とする支那問題と結ばれて今日に於ける國際關係の紛糾は相當多難な前途を豫測させるものがあると言はねばならぬ。此時にあたり極めて有意義な本書の刊行を見たことは我國讀書界の喜びとする所であらう。(定價金參圓)。(近山金次)

ナポレオンの性格(ホランド・ローズ著 砂川一平譯)

邦文のナポレオン評傳も少くないが、興味本位の英雄傳風のものも多く、深い學的研究に立脚し、正鵠を得た判断のうかがはれる書は求むるに困難である。その意味で、砂川氏譯『ナポレオンの性格』は、ひとりナポレオンの研究者にとつてのみならず、評傳の一つの形式を示したものとして有益な文獻である。著者ホランド・ローズ博士は The Revolutionary and Napoleonic Era の快著を始めとして我が國にもよく知られるナポレオン時代史海戰史の専門家である。巻頭の原著者序文にもある如く、本書は多年の研究の成果であり、通俗的ではあるがそれだけ普及性のある著者の自信作であらう。

全篇八部に分れてゐるが、その内容を概観すると、第一講『人間』は全篇の序論であり、ユルシカに於けるナポレオンの準備時代として、その家系、教養(特に史學に専心したること)、叛逆性、復讐性等のユルシカ氣質が如何に彼に受け繼がれ、その後年の活

動に散見するかなどが詳細に述べられ、熱情的、性急な性格なれども意志の制御力に缺けず、冷静な畫策を忘れなかつたことなど論述せられてゐる。第二講『ジャコベン』は、ナポレオンがユルシカの獨立を諦め、革命の風雲に乗じてフランスに登場した事情を述べる。ルソ一の理想に心酔した青年ナポレオンが、始めはジャコバン黨に加はり共和主義を守つてゐたが、ロベスピエール等と目的を異にし、フランスの統一のため如何に奮闘するに至つたかの次第が敘せられ、第三講『武人』に於ては天成の戰略、戰術家としてのナポレオンを活寫し、初期のイタリー戰役を始め、數々の大戦役を通じて勝利の奇蹟が奈邊に存したかを、ナポレオンの戦前に於ける地理的環境や特殊の狀況の詳細な分析、調査を述べて明かにし、最後にこの戰勝そのものが、ナポレオンを驅つてあくまで征服的野心を追求せしめ、フレデリック大王の如く適當の時に消極政策に轉じて、得たものを保護する態度をとらしめなかつたことを述べ、過大の自信力から來た方策の硬化、四圍の變化に對する盲目が失敗に導いたことを明かにしてゐる。第四講『立法者』は、少壯時代より、リクルグスの法制に注意してゐたナポレオンが革命後の内政整理と立法事業に如何にその天才を發揮したかが述べられ、革命時代の政治機關が知らず知らず彼の思ふまゝに改變せられたこと、ローマ法王との協約、學制改革の方針、ナポレオン法典、レジョン・ド・ノールの制度などが詳述せられ、革命を鎮壓したるものはブリュメールのクーデターではなく彼の立法事業であつた、といふのが結論となつてゐる。第五講『皇帝』に於ては、國民が革命に疲れて内政の新たな統一を欲

してゐた風潮を察したナポレオンが、組織者として如何にその手腕を發揮したか、國民の動向を知つて之を導くと共に、自己の專制慾を充たすためには如何なる手段をも辭しなかつたこと、しかして最初は彼に對する國民の個人的信望によつて政治も成功したが、大陸封鎖令の強行が無理を招き、内政上の彈壓方針も次第に不平を呼んだ次第が論評せられてゐる。第六講『思索者』はナポレオンの思想の解剖ともいふべき一篇で、著者みづからもいふやうに困難な題目であるが、豊富な史料の引用によつて、ナポレオンの實際的、功利的態度、運命よりも自己の實力を信じ、それより逆に運命をも支配せんとしたことが述べられ、なほ文學、藝術の嗜好、史學に對する解釋(主としてタキッスの批評)と洞察、宗教思想に對する態度などが興味深く述べられてゐる。第七講『世界統治者』に於ては、エジプト遠征より始まるナポレオンの東方征服計劃が後來種々の形に於て行はれんとしたこと、及び大陸統一策に於てイギリスを壓服せんがため焦慮したること、平和の好機をとらへ諸般の實力が整備し、外交が成功したる後行動せんとせず、功を急いで東方政策並に大陸統一に失敗したことなど、更に對スペイン政策の失敗により露帝の背反となつて最後の失敗を招いた次第が、性格の解剖を以て論ぜられ、第八講『流人』に於ては、エルバ島の流謫及びセント・ヘレナの最後の生活を種々の角度から觀察し、この偉人が最後まで強靱な精神力をもつて思索を續けたこと、ナポレオンを取巻く人々との交渉など興味多く描寫され、最後にナポレオンが成功に至るのは比較的容易であつたが、その成功を維持することの出来なかつたこと、晩年に至つ

て活動力の缺乏が彼を失敗に導いたのではなく、その活動力を調整すべき批判力を失つたことが失敗の眞因であるとして全篇の結論としてゐる。

本書を一貫する基調はナポレオンの性格の内面的考察であり、性格の變化が事業の成敗を決定する要因となつたことが明かにされてゐる。偉人とその時代との關係を考察する如何なる論者も、あくまで史實に立脚したる、この秀でた論述によつて省察と裨益を與へられることは多大であると信ずる。終りに、固有名詞の誤讀など多少散見したが、翻譯と氣づかないまでに平明な、こなれた譯文をもしたる譯者に充分の敬意を表したい。(明治書院發行、定價二圓八十錢)(平山榮一)

漢以前の古鏡の研究(梅原末治著)

東方文化學院京都研究所研究報告第六冊

本書は別題を「戰國秦式鏡の性情と銅鏡の起源に就いての考察」と云ひ、支那の古銅器に關して續々と清新にして周緻な研究を發表される著者の近業である。

從來學術的に研究された鏡鑑の沿革は漢代までしか遡り得ず、しかも漫然秦鏡の名によつて呼ばれてゐる漢以前の古鏡の近年次第に發見され増加する状態に鑑み、著者が最近三ヶ年間本邦は固よく遠く歐米に流出した新資料をも蒐め、之に從來より著者の集められてゐたものを合せて約三百面に達した爲、これらの遺品も整理案配して所謂秦鏡の集成圖を作製し、同時に如上の資料に基

く著者の研究と、それによつて導出される銅鏡の起源の問題を開陳せられたものである。

著者は先づ所謂秦鏡を現在所藏してゐる歐米及び本邦の各博物館・美術館并に個人を舉げ、その出土地としては淮河流域及び同流域の安徽省壽州、洛陽金村を主要なるものとし、その他支那の本土以外にあつても、オールドス地方、西伯利亞のミヌシエンスク、トムスク地方、北部朝鮮の樂浪、我九州の三雲から若干の發見が知られてゐることを記し、次いで所謂秦鏡の諸式を分類して、純地文鏡、獸文鏡、連弧文鏡、變様羽狀獸文地丁字鏡、變様羽狀獸文地花菱鏡、變様羽狀獸文地獸形鏡を第一群とし、細地文諸鏡、蟠螭文鏡を第二群とし、蟠螭透文鏡、禽獸透文鏡、嵌石透變様獸渦文鏡、金銀錯文鏡、異式獸形鏡を第三群となし、其等の様式觀に於いて、遺品の多いのは細地文鏡と蟠螭文鏡及び變様羽狀獸文地諸鏡であるが、これらに前述の諸例を加へると種々の違つた形式に互つてゐて、嘗て一部論者の説いた様に、細緻な地文の上に所謂影繪的な圖像を配した式のみを以て所謂秦鏡の特色の凡てを表したものとなし、或はまた動物の立體的な肉彫がその上に表れてゐないのを強調するが如きことは、その特徴を竭し得たものとする事が出来ない。否寧ろ漢様式などに較べて種々の違つた式の並存と云ふ所に秦鏡様式の特色があること、形式學的に圓形その他四角な鏡が存在し、また表裏二枚を組合せて一の鏡體を形造つた遺品があり、これは漢鏡がすべて圓形であり、形の違つたものは唐代に至つて始めて現れたとする在來普通の見方を全然變改せしめる新事實であること、又形式の多樣を特色としつゝも、これ